岐阜県博物館調査研究報告，(17)：125—134．Mar. 31，1996

研究ノート　岸駒の「岸矩」時代と「雪中松虎図」をめぐって
附　岸駒作品年表（稿）

岩　佐　伸　一

"Pine and Tiger in Snow" by GANKU
Appendix "Chronological table of GANKU's works"(draft)

Shin'ichi IWASA

1．はじめに

『里見八犬伝』で知られる滝沢馬琴に『羇旅漫録』（享和三年・1802刊）という随筆がある。そのなかには次のような一文が記されている。

　畫ハ月溪と雅楽助のみ，蘆庵應舉尤もおしむべし

ここでいう月溪とは呉春（1752～1811），雅楽助は岸駒（1749/56～1838）を指している。

江戸の馬琴には京都画壇の立役者として呉春と岸駒が真先に思いついた結果の一文であっただろうが，当時はまだ原派の祖である原在中や，源琦・蘆雪を除く応挙十哲らの活躍期であり，別段呉春と岸駒しか絵師が存在しなかったわけではない。

ところが馬琴はあえて「月溪と雅楽助のみ」と言い切っており，その他の絵師には存在の余地さえ与えていない。

また『羇旅漫録』より十年ほど後，文化十年（1813年）ころの資料とされる「平安畫工視相撲」[1]には，呉春は没していたためか記載されていないが，岸駒のほうは「大関　岸雅楽之助」として東の筆頭に据えられている。

もちろん有名人には付きものの逸話的な話も数多くあり，これが後世の岸駒像—作品の善し悪しよりも人間性による価値判断の優先—の根幹を成すにいたっている。

たとえば，『雨月物語』で知られる上田秋成の『胆大小心録』には，

　岸駒の画代を貪ることまた（応挙の；筆者注）一階上にあり

とある。

同様に，江戸時代末期の画家，竹本石亭（1822～1888）の『石亭画談』においても，

　余，近時人の為に画を帆足某に索む。某曰，一紙にして金三両の謝金にあらざれば画かずと。
　余，一日書を致して是を詰て曰，京師の画人，竹洞，梅逸，岸駒，海僊輩，生前其名高くして多くの潤筆を得たり。死後無価は豈，恥る所にあらずや。

ともあり，いずれも岸駒の金銭に対する執着ぶりを非難している。

善きにつけ悪しきにつけ，文化年間（1804～1818）における岸駒は京を代表する絵師であったことにはまちがいない。

ところが，岸駒の没後，特に彼の組織した流派が衰微した明治後期以降，現在にいたるまでの間に急速にその評価が下がっている。このことは歴史ある美術誌の『国華』（明治二十三年＝1890年創刊）に取り上げられた岸駒作品の点数を見てもよくわかる。

　1890年～1945年　　11点
　1946年～1995年　　3点

特に戦後はあまり取り上げられることもなく，現在までこのような状況が続いている。

これらの事が示すように，現代における岸駒の評価は地に墜ちたと言っても過言ではない。そのため岸駒研究といえるものはあまり存在せず，岸駒について書かれた多くは，逸話・伝記・作品紹介などの断片的なものにとどまっているのが現状である。

本論もそれらの域を出るものではないが，いずれなされるであろう岸駒の総合的研究には欠かせない作風形成の過程—いわゆる「諸派折衷」—を検討するに際し，重要な位置を占めるであろう若描きの一例を示すことにより，岸駒研究の一助となることを望むものである。

2.「蘭齋岸矩」時代について

岸駒伝については，岸家伝来の『天開翁略年譜』及び補注[2]や田中豊蔵「蘭齋岸駒」[3]がたいへん参考になる。それら岸駒伝のなかでも最も問題になるのが出生の年についての問題であろう。現在のところ寛延二年説（1749）と宝暦六年説（1756）があり，いまだ決着をみていない。[4]

さて，もうひとつ年代についてあいまいなところがある。それは，岸駒が「岸駒」という表記を用いる前に使用していた「蘭齋岸矩」という名を使っていた時期についてである。

岸駒の作画時期による画風の検討はいまだなされていないので，この時代の範囲についても考察は行われておらず，「若描き＝蘭齋岸矩時代」程度の認識であろうと思われる。本稿においては，「蘭齋岸矩」時代の作品を紹介する手前，管見の限りではあるが，この時代の範囲についてふれておきたい。

岸駒が「駒」の字を用いるようになったのは，有栖川宮織仁親王から「名を駒，字を賁然，号を華陽」と与えられて以降であることには間違いないが，この時期が『天開翁略年譜』では天明四年（1784）八月，『織仁親王行実』では天明五年（1785）となっており若干の違いがみられる。

現在のところ天明四年の款記を有する作品は発見されておらず，この年に「岸駒」としたかどうかはわからないが，京都・洛東遺芳館所蔵の「唐美人図」には「天明乙巳初冬　華陽岸駒寫」とあるところから，天明五年の秋ころには有栖川宮から「駒」を与えられ，「岸矩」をやめて「岸駒」を名乗っていたことがわかる。

さて，「（蘭齋）岸矩」落款と類似するものに「岸雅楽助矩寫」[5]のように「雅楽助」と「矩」を組み合わせた落款が二点ほどある[6]。これは，武田恒夫氏が指摘されているように[7]「岸矩」から「岸駒」への過渡期に描かれたものと考えられる。

それは，「雅楽助」の称号を与えられたのが天明四年の九月十三日であり[8]，この時はまだ有栖川宮家側の記録には「駒」を与えたとはなく，「雅楽助」とは別に翌年「駒・賁然・華陽」を授けたと『織仁親王行実』にあるからである。（ここでいう「翌年」は前述のとおり「唐美人図」の款記から天明五年の秋ころ＝初冬以前をさす）ゆえに，この時期には「雅楽助」と「矩」を組み合わせた落款を使用したと考えるのが妥当であろう。

なお，もうひとつの史料『天開翁略年譜』の記事では，「今年八月に有栖川宮に召されてありかた被仰付雅楽助といふ名を下し玉ふ実名岸駒と改め字賁然と付給ふ」とあるが，もしこの「雅楽助」と「駒」の同時下賜が事実であるならば「蘭齋岸矩」からいきなり「雅楽助岸駒」へ款記がかわるはずであり，「雅楽助」と「矩」の組み合わせ落款の存在する余地はない。ところが事実，「岸雅楽助矩寫」という款記のある作品が確認されているところからも同時の下賜は否定されるべきで，この件については『織仁親王行実』の記事に従うべきであろう。

ゆえに「雅楽助」と「矩」を組み合わせた落款をもつ作品は，天明四年九月十三日から天明五年の秋ころまでの間に描かれたものと推定され，「岸駒」を名乗る直前に描かれたという事ができよう。

さて，「岸矩」時代の下限は以上であるが，上限はどのようであろうか。

既出の『天開翁略年譜』によると，安永四年（1775）に，

今年より名を改め玉ひて岸矩と付玉ふ　また蘭齋と号け玉ふ

とある。ただし，この年の款記をもつ作品は発見されておらず，作品から確認できるのは「墨蘭図」[9]にある「岸矩峯本寫酉仲夏十六日」の落款からわかる安永六年（1777）以降である。

他にこのことについてふれている史料がない現在，『天開翁略年譜』に従うこととしておく。

このように岸駒の「岸矩」時代は，おおよそ安永四年から天明四年秋～五年の秋ころまでの時期をさすのが妥当と考えられる。この後，雅楽助，越前介，越前守を名乗ることとなる。

さて，「岸矩」時代の時期を区切ったわけだが，この頃の岸駒の行動はどのようであったのだろうか。『天開翁略年譜』を中心に見てみると，

安永七年（1778）　上洛するが父の容体悪化にともない帰国。
安永八年（1779）　母を携えて再び上洛し，名を健亮と改める。
安永九年（1780）　斉藤氏の娘と結婚する。
天明元年（1781）　光格天皇即位に伴い，「春秋花鳥」屏風一双を描く。
天明二年（1782）　七月　『平安人物誌』に掲載される。
　　七月　京都島原の角屋に「墨梅図」（杉戸絵）を描く。
天明四年（1784）　有栖川宮の画事を勤める。
　　禁裏御用につき「玄宗皇帝花軍図」屏風一双，「沈香亭詩意」一軸を調進する。

とある。

「岸矩」時代の行動としてわかるのはこの程度であり，あまり十分なものではないが，地方から上京したきた一青年ゆえ，この程度の情報しかないのは仕方のないことかもしれない。

しかし，ここで驚かされるのは再上洛の二年後には御所の御用を勤め，その翌年には京都の学芸分野の紳士録である『平安人物誌』に掲載されるなど，すでに相当の技量と名声があったと考えられる点にある。

もちろん，いま挙げた以外にも数多くの作品を残しており，「岸矩」時代に描かれた作品は管見の限りでは，年紀あり25点，年紀なし9点の計34点[10]がある。以下，紹介する資料は，「岸矩」時代の画技の水準を示すものとして，また，画壇における彼のスピード出世をうなずかせる力作として，注目すべきものである。

3．「蘭齋岸矩」時代の新出資料について

岸駒といえば「虎」といわれるが，その現存作では最も古いものが本図である。

「雪中松虎図」　一幅　絹本著色　たて105,1×よこ36,6センチメートル　個人蔵

背景には墨を刷き，画面左中ほどから右上へ斜めに雪を積もらせた松が描かれている。その下には虎の半身像が見え，赤い舌が生々しい。

画面左下には，次のような款記が見られる。

天明癸卯夷則日
蘭齋岸矩寫
（印三顆あり）

これにより，この作品は，天明三年（1783）の七月に描かれたことがわかる。

天明三年といえば，円山応挙五十一歳の年にあたり，「絵は応挙の世に出て，写生といふ事のはやり出て，京中の絵が皆一手になったことじゃ」[11]というくらい「写生」一色の時期であった。

その応挙の作品にはいくつかの虎図が見られるが[12]，その形状の多くは，後ろ足を折り腰を地におろし，前足をふんばったかたちに描かれており，実際ありそうではあるが，動きに乏しい感が強い。

図1　岸駒「雪中松虎図」

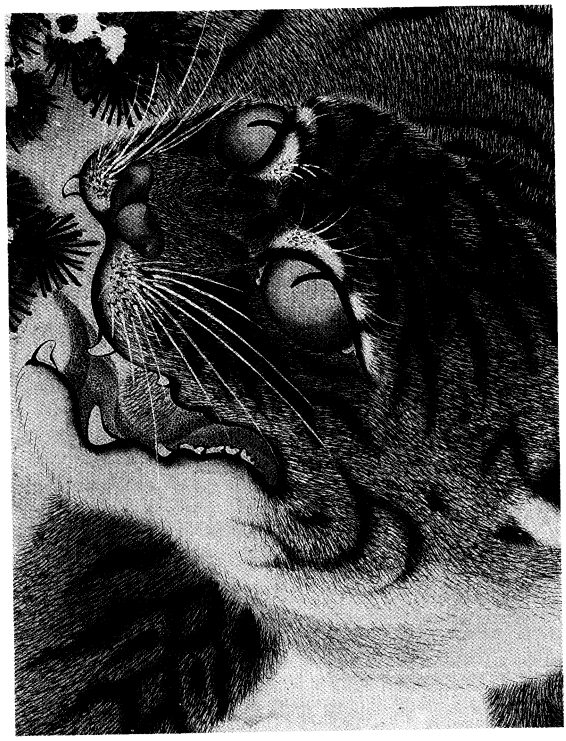

図2　同　部分

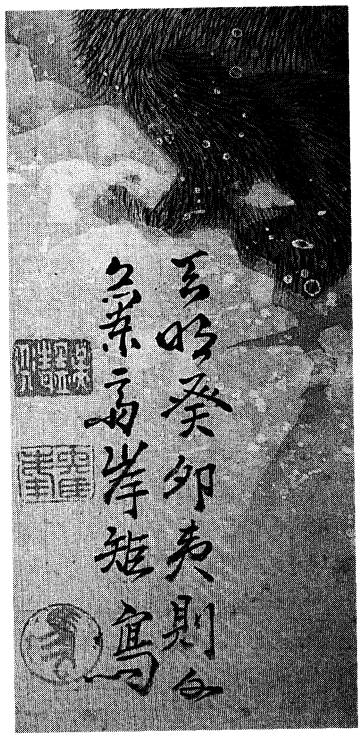

図3　同　落款部分

このような虎の形状は，管見の限りでは安永八年（1779）から天明七年（1787）ごろにかけて複数制作されている。もし，この時点で岸駒が応挙の影響を強く受けていれば，岸駒の虎も応挙様になっていたであろう。ところが，本図を見るに，応挙の描く典型的な虎図とは異なり，全身を描かず，口を開かせ波打つ舌を見せることにより，その動きと獰猛さを半ば誇張して表現しようとしている。

また，応挙の場合，土坡は描くものの背景はほとんど余白のままであり，その点においても本図とは趣を異にしている。

では，全く岸駒独自の描き方かというとそうとも言えない。

例えば，背景に墨を刷き，積雪の部分を白く塗り残しそのコントラストの対比によって雪を表現しようとする試みは，南蘋系の画家達によって頻繁になされている描法である。落款右上近くに見られるように胡粉を勢いよく画布に散らし雪の粉末感を表わす方法も，伊藤若冲[13]や葛蛇玉[14]の作品に見られ，どの流派の表現を参考にしたかは特定できないものの，既に先行した例がある以上，何らかの絵から影響を受けたものと思われる。

では，款記の方からは何か読み取れるだろうか。

「雪中松虎図」が描かれる前年までの落款には「倣丹丘生筆法」や「倣黄筌筆法」などの中国の有名画人に倣った旨の款記が幾つか見られる。実際それらの絵から記入された画家の影響を明確に指摘することは難しいのだが，岸駒本人がそう記す以上，本人の意識のなかでは未だ独自の画風を確立したとは感じておらず，目下修行中であるということを表明した結果の款記ではなかろうか。または，そこまで控え目に受け取らず，自らの絵を権威づけるための名目だけかもしれないが，いずれにしろ他者の名前を出している以上，自身の絵に何らかの引け目を感じていたのではないだろうか。

ところが，「雪中松虎図」が描かれた天明三年以降，亡くなるまで一点も「倣（誰々）」という款記は見られない。このことから岸駒自身の意識の中において，自らのブランドに自信を持ち独自の画風を打ち立てようとする方向へ進んでいった可能性を指摘しておきたい。

さて，「岸矩」時代に描かれた花鳥及び動物画は，現在十点ほどが知られるが，それらの多くには「ある動作における一瞬の動き」が表現されている。

典型的なのが「芭蕉下猫捕小禽図」[15]の背景に見られる「けしの花弁とおしべががくから離れ，地につくまでの一瞬」をとらえた図様であり，このような対象のとらえかたは「雪中松虎図」における虎の舌先や尻尾の先の表現にも見ることができる。

岸駒の花鳥・動物画において，「動き」の要素は後年の作品からも読み取れるが，「岸駒」を名乗って以降，少々「岸矩」時代とは違った点も見られる。

それは，先程の「芭蕉下猫捕小禽図」や「雪中松虎図」では背景が「（何らかの）もの」で埋まっており，余白の割合がごく小さい。これに対し「雅楽助岸駒寫」の款記を持つ「牡丹図」[16]や同じく雅楽助時代の作品である「秋卉双鶏図」[17]などは，先の二点に比べてずいぶん余白部分が多い。このことは，「岸駒」を名乗ったその年の作品「牡丹孔雀図」[18]にも早速見られるところから名前の変更をきっかけに画面構成の方法にも変革意識が働いたと考えられるのではないだろうか。

4．おわりに

本稿は，「岸矩」時代について若干の整理を試み，あわせてその時期において注目される新出資料を紹介した。もっとも，その核心の第三章においては不十分な点も多く，今後の「岸矩」作品の調査・研究に待つ部分もかなりあると思われる。

岸駒の作品は，確認されているだけでも全国各地に見られ，本県内にも数多くの作品が伝わっている。今後も「岸矩」時代の作品が発見される可能性は高く，岸駒の若年期における画業の実態，

及び，画風形成の過程がより詳しくわかるようになるかもしれない。

現在，あまりよい評価を得ていない岸駒であるが，探して見ればなかなか丁寧な仕事をしているものもあり，一概に「濫作」ばかりとも言えない点がある。本稿がそのような作品に目を向けていただける小さなきっかけとなれば幸いである。

末筆ながら，調査に御協力いただいた飯田弘氏，大津市歴史博物館学芸員・横谷賢一郎氏に厚く御礼申し上げます。なお，文中に使用した写真は，横谷氏撮影のものを使用させていただきました。

注記

1）『増補　古画備考』　朝岡興禎　　思文閣　1970年（復刻版）　中巻　1183ページ
2）『没後一五〇年記念特別展　岸駒』図録　　富山美術館編　1987年　に収録。
3）『国華』第362号　（1920年７月）
4）この点については，武田恒夫氏の「岸駒の『岸矩』時代」（『角屋研究』第３号　1993年）に簡潔にまとめられている。
5）「関羽図」個人蔵の落款。富山美術館にて開催の「没後一五〇年記念特別展　岸駒」に出品。
6）前注の作品及び「花鳥図屏風」（株）播磨屋本店蔵の二作品に見られる。
7）武田恒夫「岸駒の『岸矩』時代」（『角屋研究』第３号　1993年）
8）『織仁親王行実』　『没後一五〇年記念特別展　岸駒』図録　富山美術館編　77ページ。
9）福井・個人蔵
10）『没後一五〇年記念特別展　岸駒』図録　富山美術館編に掲載の分，及び筆者が確認したものによる。
11）上田秋成　『胆大小心録』
12）「虎図」　明和二～三年（1765～1766）ころ
　「虎図」　安永八年（1779）
　「虎図」　安永九年（1780）
　「龍虎図」　天明元年（1781）
　「虎図」　天明五年（1785）　　アメリカ・プライスコレクション
　「虎図」　天明六年（1786）　　東京国立博物館
　「遊虎図襖」　天明七年（1787）　　香川・金刀比羅宮
　「王羲子・龍虎図」　天明七年（1787）　　兵庫・大乗寺
　「虎図」　寛政三年（1791）
　などが，挙げられる。
13）伊藤若冲　動植綵絵のうち「雪中鴛鴦図」（宮内庁蔵）などに見られる。
14）葛蛇玉　「雪中兎・鴉図」（アメリカ・プライスコレクション）
15）『国華』第1066号（1981年）
16）個人蔵
17）富山美術館蔵
18）大阪市立美術館蔵

参考文献

竹本又八郎　「石亭画談初編」（「芸苑叢書」1918年）
田中豊蔵　「蘭齋岸矩」（『国華』第362号）　1920年
国華編集部　「翡翠図」（『国華』第362号）　1920年
楢崎宗重　「芭蕉下猫捕小禽図」（『国華』第1066号）　1983年
宮島新一　「三都における南蘋画風の流伝」（『大和文華』第73号）　1985年
富山美術館　『没後一五〇年記念　岸駒展』図録　1986年

宮島新一　「岸駒」（『没後一五〇年記念　岸駒展』図録　所収）　1986年
武田恒夫　「岸駒の『岸矩』時代」（『角屋研究』第３号　所収）　1993年
兵庫県立歴史博物館編　『没後二〇〇年記念　円山応挙展』図録　1994年
京都国立博物館　『没後二〇〇年記念　円山応挙展』図録　1995年
佐野美術館　『植松家と文人墨客』図録　1995年

岸駒作品年表（稿）

本年表は，岸駒の現存する作品のうち，制作年が明らかなもののみを対象に収録した。

なお項目は，各年の一行目には和暦，西暦，干支，『天開翁略年譜』による年齢，『政隣記』による年齢，二行目以降には作品名，落款，所蔵者の順に記載した。落款表記部分において，一字あきがある場合は改行を示す。

本稿を作成するにあたり，富山美術館編『岸駒展』図録がたいへん参考になった。

また，京都大学教授・佐々木丞平氏，京都市文化財保護課技師・小嵜善通氏，大津市歴史博物館学芸員・横谷賢一郎氏にご教示いただきました。ここに記して謝意を表します。

安永六年　（1777）　丁酉　29歳／22歳
　墨蘭図　岸矩峯本寫　酉仲夏十六日　個人蔵

安永九年　（1780）　庚子　32歳／25歳
　樹上双猿図　庚子二陽日倣丹丘生筆　法蘭齋岸矩峯寫　個人蔵

安永十年／天明元年　（1781）　辛丑　33歳／26歳
　芭蕉鶏図　安永丑三陽日倣黄筌筆　法可北山樵蘭齋岸矩寫　埼玉・遠山記念館蔵
　琵琶行図　安永辛丑仲春日倣　丹丘生筆法蘭齋岸矩寫　富山・富山美術館蔵
　鶴図（双幅）　天明辛丑仲夏日　可北山樵蘭齋岸矩寫　個人蔵
　　可北山樵岸矩寫
　山水図　天明紀元辛丑仲秋日蘭齋岸矩寫　個人蔵
　楊柳翡翠図　辛丑夷則日　蘭齋岸矩寫　国華362号掲載
　郭子儀図　天明辛丑二陽日蘭齋岸矩寫　個人蔵
　柳下睡士図　天明辛丑二陽日倣李子訓筆法　可北山樵蘭齋岸矩峯寫　京都・角屋蔵
　寿老人図（三幅対）　天明紀元辛丑初秋寫（ほか）　個人蔵

天明二年　（1782）　壬寅　34歳／27歳
　芭蕉下猫捕小禽図　天明壬寅初夏日蘭齋岸矩寫　国華1066号
　サムソンとライオン図　天明壬寅仲夏日寫　可北山樵岸矩峯擬古　個人蔵
　墨梅図　天明壬寅夷則日倣丹丘生　筆法可北山樵岸矩峯寫　京都・角屋蔵
　雪松双鶴図　天明壬寅仲秋日寫蘭齋岸矩　個人蔵
　兎福寿草図　天明壬寅仲冬日倣呂紀　筆法蘭齋岸矩峯寫　石川県立美術館蔵

天明三年　（1783）　癸卯　35歳／28歳
　林和靖図　天明癸卯仲春日　蘭齋岸矩寫　個人蔵

雪中松虎図　天明癸卯夷則日　蘭齋岸矩寫　個人蔵

天明五年　(1785)　乙巳　37歳／30歳
唐美人図　天明乙巳初冬　華陽岸駒寫　京都・洛東遺芳館蔵
牡丹孔雀図　天明乙巳　華陽岸駒寫　大阪市立美術館蔵

天明六年　(1786)　丙午　38歳／31歳
酔李白図　丙午仲夏寫　華陽岸駒　京都・角屋蔵
寿老人図　丙午夏日寫岸雅楽助平駒　個人蔵
墨梅図　天明丙午仲秋　岸雅楽助平駒　滋賀・大通寺蔵

天明七年　(1787)　丁未　39歳／32歳
山水図　丁未仲春寫　雅楽助岸駒　米国・バークコレクション
松竹梅図　丁未暮春寫　雅楽助岸駒（ほか）　京都・角屋蔵

天明八年　(1788)　戊申　40歳／33歳
鶴図（双幅）　戊申仲春寫岸駒賁然　富山・富山美術館蔵
賁然
波に鷲図　天明歳在戊申五陽写雅楽助岸駒（ほか）　個人蔵

寛政二年　(1790)　庚戌　42歳／35歳
千里独行図　雅楽助岸駒謹寫　個人蔵

寛政六年　(1794)　甲寅　46歳／39歳
月梅図　雅楽助岸駒　東京国立博物館蔵

寛政八年　(1796)　丙辰　48歳／41歳
山水図　丙辰冬寫　雅楽助岸駒　東京芸術大学蔵

寛政十年　(1798)　戊午　50歳／43歳
双鶴図　寛政歳次戊午夏　虎頭館岸駒寫　個人蔵

寛政十二年（1800）　庚申　52歳／45歳
唐人物図　寛政庚申春寫　虎頭館岸駒　京都・本禅寺蔵

寛政十三年／享和元年（1801）　辛酉　53歳／46歳
山水図　写此一幀餞蘭渓翁帰　郷雅楽助岸駒　静岡・徳源寺蔵

享和三年　(1803)　癸亥　55歳／48歳
布袋図　享和三癸亥　歳筆岸駒　個人蔵

享和四年／文化元年（1804）　甲子　56歳／49歳

恵比須大黒図　甲子三陽春　岸駒　個人蔵
松虎図　雅楽助岸駒　滋賀・長浜市宮司町蔵
虎図扁額　雅楽助岸駒　岡山・総社蔵　1）

文化二年　（1805）　乙丑　57歳／50歳
芦雁図　乕頭館岸駒　個人蔵

文化五年　（1808）　戊辰　60歳／53歳
虎図　文化戊辰夏寫　乕頭館岸駒　個人蔵

文化九年　（1812）　壬申　64歳／57歳
山水図　壬申仲夏於駿東　卉僊堂中平安岸駒写　静岡・徳源寺蔵

文化十年　（1813）　癸酉　65歳／58歳
四家印譜　文化十年癸酉六月　岸越前介平駒　個人蔵

文化十一年（1814）　甲戌　66歳／59歳
無赦隠士図　文化戊春写應木津生需寫　同功館岸駒　個人蔵
深山群仙図　文化甲戌仲春寫同功館岸駒　個人蔵

文化十三年（1816）　丙子　68歳／61歳
二見日の出図　文化丙子孟夏寫於　二見越前介岸駒　京都・洛東遺芳館蔵

文化十四年（1817）　丁丑　69歳／62歳
中寿老人左右梅図　越前介岸駒　個人蔵

文化十五年／文政元年（1818）　戊寅　70歳／63歳
伯牙弾琴図　文政改元夏寫　於□□楼越前介岸駒　個人蔵

文政二年　（1819）　己卯　71歳／64歳
関羽図　岸駒　富山市郷土博物館蔵

文政四年　（1821）　辛巳　73歳／66歳
波涛図　（一部焼失につき款記不明）　京都・角屋蔵
日蓮上人像　無款　京都・妙覚寺蔵
日蓮上人像　無款　京都・本禅寺蔵

文政五年　（1822）　壬午　74歳／67歳
猛虎図　文政壬午仲秋寫　越前介岸駒　東京・サントリー美術館蔵
出山釈迦図　越前介岸駒敬寫　為曾祖父三霊報恩奉妙経千部　京都・天寧寺蔵

文政六年　（1823）　癸未　75歳／68歳

芭蕉涅槃図　　文政癸未初冬寫為　俳仙堂主人越前介岸駒　　個人蔵
波に虎図　　文政癸未一陽望　寫為中村氏岸駒　　東京国立博物館蔵

文政七年　(1824)　　甲申　　76歳／69歳
虎渓三笑図　　(落款不明)　　京都・修学院離宮
出師祭天之図　　文政甲申□日春寫九巣楼同功岸駒　　京都・角屋蔵

文政八年　(1825)　　乙酉　　77歳／70歳
鯛図　　己酉秋九月日寫　天開窟岸駒　　京都・角屋蔵
黄石公・張良之図　　文政己酉春寫　於天開窟岸駒　　富山県立図書館蔵

文政九年　(1826)　　丙戌　　78歳／71歳
猛虎図灯篭　　越前介岸駒　　京都・清水寺蔵　2)

文政十年　(1827)　　丁亥　　79歳／72歳
雲龍図　　文政丁亥歳応需諾東寺　観音堂天井寫裸龍図今　試図之　　個人蔵
龍図　　文政歳應需諾　東寺食堂天井寫　裸龍因而試図　之越前介岸駒　設發墨連山
　　京都・鳴滝大仙寺蔵
壽量品之偈　　岸駒□天開翁　　個人蔵

文政十一年 (1828)　　戊子　　80歳／73歳
懐素書蕉葉図　　同功館岸駒　　京都・天寧寺蔵

天保二年　(1831)　　辛卯　　83歳／76歳
寒山拾得図画塔　　天開翁岸駒　　京都・実相院蔵

天保七年　(1836)　　丙申　　88歳／81歳
猛虎図扁額　　天開翁岸駒　　富山・福光八幡宮蔵

天保八年　(1837)　　丁酉　　89歳／82歳
群鶴図　　朝散太夫岸駒　　新潟・願王閣　3)
伯陽図　　越前守岸駒　　個人蔵

天保九年　(1838)　　戊戌　　90歳／83歳
関羽出陣図　　朝散太夫越前刺史岸駒　時年九十　　国華117号
梅月図　　朝散太夫越前守岸駒行年九十□　　4)

注記

1) 奉納銘「文化元年甲子季秋佳辰　　亀山侂蔵武綱」
2) 奉納銘「文政九年丙戌春　納洛東大悲閣」
3) 奉納銘「天保八年丁酉六月吉祥日　　願主富取倉太正敬　富取良助正敏」
4) 思文閣墨跡資料目録　第276号　(京都・思文閣発行　平成7年6月) に掲載。